

「生活(生活する)と「暮らし(暮らす)」の意味分析

藤田 勝 良

1. 共通する意味分野

二つの名詞、「生活」と「暮らし」は、次の(1)(2)のように、主体がみずからをとりまく社会関係の中で活動し、日々を生きていく事という意味を共通に表わす。また、ともに狭い意味では、生計の意味で(3)(4)のように用いられる。

(1) 北の地方の生活。 (2) 北の地方の暮らし。

(3) そのお金で生活が成り立っている。 (4) これでは暮らしが立たない。

本稿では、文章作品や談話での実例を中心資料とし、これに作例を併せて、二つの語の意味用法の違いの一端を捉えてみたい。

なお、各々「生活する」「暮らす」という対応する動詞形が存在する。これらは、名詞、動詞という品詞的特性の違いを除いて、意味用法は多く「生活」「暮らし」と重なりとみられる。例えば次の(5)(6)は、(1)(2)と対応する。

(5) 北の地方で生活する。 (6) 北の地方で暮らす。

本稿では「生活する」と「暮らす」の二つの動詞の表現にみられる違いも、名詞に対応すると考えられるものについては併せて記述することとする。ただ、名詞と動詞で、品詞的特性以外に意味特徴の違いのある場合は、別にこれを記述する。

2. 従来の研究

2. 1 名詞—「生活」「暮らし」についての記述

名詞については、徳川・宮島(1971)に、二語を比較した次のような記述がある。

「ほとんどおなじだが、しいていえば、「生活」のほうが、生きかた全体に関係し、「暮らし」は経済水準と関係していることが多い。「暮らしを改善する」は、おもに経済状態がもっとよくなるのにもなって衣食住の質や量がよくなることで、「生活を改善する」は、たとえば和式を洋式にきりかえたり、合理化したりすることをさす。ただし、これは傾向という程度で、どっちにしても大差はない。「こどもの生活」はいいが「こどもの暮らし」はおかしいのも、「暮らし」がおもに経済との関係で問題になることばで、世帯を単位にしていうことが多く、独立の収入もないようなこどもにいうのが不似合いだからだろう。なお「暮らしむき」ということばはあるが、「生活むき」はない。」(143頁)

この記述では、「生活」のほうが生きかた全体に関係していることが多い事、「暮らし」が経済的な面で世帯を単位にしていうことが多い事の二点を指摘している。

一方、遠藤他編(1993)は、「生活」「暮らし」を「世渡り」「渡世」「処世」「世過ぎ」と対比して「家族を養って生計をたてていくこと」に多く使われるとしている。これは、徳川・宮島(1971)の「暮らし」の方についての指摘と対応する記述になっている。

2. 2 動詞―「暮らす」についての記述

動詞については、森田(1984)に、「暮らす」を「住む」と比較した次のような記述がある。(151頁～152頁)

「「暮らす」が日単位で時を送り過ごす行為で、一時的な生活の場としてや、本居とは別の場所での臨時の生活でも構わないのに対し、「住む」はあくまでその人(や動物)の生活行為の場として一定の居所を定め、そこに身を置く行為である。」

「「AガBデ暮らす」と、助詞「で」を取る。それだけ「暮らす」には動作性の意味合いが強い。

田舎で・・・暮らす、日を送る、過ごす、年を越す、時をつぶす
とデ格に立つ動詞はいずれも行動的である。

「昨日は何もしないで一日暮らした」「毎日あくせく働いて暮らす」

「寝て暮らすのも楽じゃない」「夏休みは山小屋で暮らした」

「夫婦で力を合わせて暮らしております」「彼はアパート収入で暮らしている」

「島で暮らすにゃ乏しゅうてならぬ」(野口雨情「波浮の港」)

これらの例は「住む」に換えることができない。ただ、ある場所や建物に居を定めているという定常的な「住む」に対し、「暮らす」には、その期間や時間を過ごすという行動性と、生活するための人間行為の営みとが言外に込められる。そのため「アパート収入で暮らす」のような経済的裏づけを必要とした、生活費を使って衣食住を支えていく行為や、あるいは「ぶらぶらと遊んで暮らす」「原稿を書いて暮らす」「一年を十日で暮らすいい男」のように無為徒食や勤労に従事しながら日を送るという”生きるためのさまざまな行為を伴った生活”なのである。「住む」よりもはるかに生ぐさい人間の生きざまがそこにはある。だから名詞形「暮らし」や「暮らし向き」には経済的な豊かさ貧しさといった生活の質的な面が問題となる。」

この記述では、「暮らす」が、日単位で時を送り過ごす行為を意味する事、表現する行為の場が臨時のもので本居でなくてもよい事、「住む」に比べて動作性の意味合いが強い事を指摘している。指摘の三点目については、森田氏があげている例の中に「寝て暮らすのも楽じゃない」や「昨日は何もしないで一日暮らした」のような無為と形容されるような動作が含まれている点に留意しておきたい。

また、名詞「暮らし」について、徳川・宮島(1971)と同じく、経済的な面が問題とされると述べていることも注意される。

この他に、遠藤他編(1993)は、「暮らす」を「過ごす」と比較し、「毎日、幸せに―」

の表現に両者を使った場合、「過ごす」は「そのようにしてその時間を送っている」というほどの意味であるが、「暮らす」には「日々の生活をしながらその時間を生きている」という意味が含まれると記している。これは、森田氏の「暮らす」についての指摘の三点目（動作性）と対応すると考えられる。

3. 辞書の記述

ここでは手許のいくつかの小型辞書の記述について概観しておく。

まず名詞の「生活」と「暮らし」について、この順にみる。

手許の辞書では、「生活」の意味として、①生き物として生きている事を、②社会の中で活動する事と分けて記していることが注意される。（注）

それぞれの意味に対応する具体的な記述、代表的な例は各辞書次の通りである。（例は、ことわりのない限り記述でとりあげた辞書の順に示す。）

- ①「生物が生きていて、からだの各部分が活動・する（している）こと。」（『新明解国語辞典第四版』三省堂—以下『新明解』と略。）、「生きて活動すること。」（『現代国語例解辞典第二版』小学館—以下『現代』と略。）、「生きて生体として活動すること。」（『岩波国語辞典第五版』岩波書店—以下『岩波』と略。）、「生き物として生きていること。生きて活動していること。」（『例解新国語辞典第四版』三省堂—以下『例解』と略。）、「生きて活動すること。」（『例解学習国語辞典第六版』小学館—以下『学習』と略。）

【例】— [野鳥の生活] [芸術生活]（『岩波』）、[学校生活]（『学習』）

- ②「社会に順応しつつ、何かを考えたり行動したりして生きていくこと。（狭義では、家族と共に食べていけるだけの余裕が有ることを指す。）」（『新明解』）、「世の中に暮らしてゆくこと。また、その暮らし。」（『現代』）、「世の中でくらししてゆくこと。また、そのでだて。くらし。」（『岩波』）、「人間社会の中で生きていくこと。」（『例解』）、「くらしをたてること。」（『学習』）

【例】— [生活能力、生活費、恵まれた生活を送る、生活をきりつめる] [日常生活、生活感情、生活を営む、生活を楽しむ] [生活が立たない] [生活設計、国民生活、生活の安定、生活がなりたつ、生活にゆとりがある] [生活が苦しい、やっと生活する]

上のように例は②に多く、①についてのものは少ない。『学習』の「学校生活」もこの二つの分類ではむしろ②の側に対応すると考えられる。これはその②の意味記述が経済に傾いていることによろう。

一方「暮らし」は、とりあげた五つの辞書のうち四つが、①日常の活動、②その経済費用、の二つの意味を記している。その記述の仕方には、両者を個別に記すものと、①を基本としてこれに②を補助的に記すものがある。

二つの意味を分けて記している辞書で、それぞれの意味に対応する具体的な記述、代表的な例は各辞書次の通りである。

①「日常生活。」(『岩波』)、「毎日毎日の生活のようす。」(『例解』)、「生活しているようす。」(『学習』)

[例] [平凡な暮らし] [暮らしぶり、ぜいたくな暮らし、いなかの暮らし] [平和なくらしがしたい]

②「生計。」(『岩波』)、「収入や支出のうえからみた生活のようす。」(『例解』)「くらし向き。生計。」(『学習』)

[例] [暮らしが立たない] [その日暮らし、暮らしをたてる] [くらしが楽になる]

①を基本として②を補助的に記すものでは次の通りである。

①(②補助)「暮らすこと。生活。また、生活費。」(『現代』)

[例] [ゆどりのある暮らし、暮らしの足しにする]

また一方、次のように時を送るという意味を中心にして①を記述したものもある。

①「毎日を過ごしていくこと。生活。」(『新明解』)

[例] [その日暮らし、暮らしが立たない、暮らしを脅かす]

以上を見ると、「生活」の②(社会の中での活動)の記述に「暮らし」が多く用いられ、「暮らし」の①(日常の活動)の記述に「生活」が多く用いられていることが注意される。二つの語がこれらの意味で交錯していることがうかがわれる。

また、「暮らし」について②の経済費用の意味がとりたてて扱われている辞書のあることは、宮島・徳川(1971)、森田(1984)の記述と対応している。ただし「生活」についても、『新明解』のように②(社会の中での活動)の意味の記述のなかで経済面の意味のあることを記述するものがあり、この意味についても両者の重なりがうかがえる。

以上名詞についてみたが、次に動詞の「生活する」「暮らす」の記述をみてみよう。

まず、「生活する」は、どの辞書でも「生活」に含められ、その動詞形として扱われている。また別個に意味記述も与えられていない。

一方、「暮らす」は、「暮らし」とは別見出しで扱われている。その意味記述では、①時を送るという事と、②種々の活動をするという事の二つを記したものが多し。「暮らし」と比べると経済の意味が退き、種々の活動という事が記述の前面に出ている事が注意される。なお、その記述の仕方は、両者を個別に記すものと、両者を併せて記すものとがある。代表的なものを文例を併せて示しておくこと次の通りである。

分けて記した辞書(『学習』)

①「日々を送る。一日をすごす。」[夏休みには、いなかの祖父母の家でくらす。]

②「生活していく。」[父の働きで一家がぶじにくらしている。]

併せて記した辞書(『新明解』)

「寝たり起きたり食事をしたり仕事をしたり遊んだりなどして、一日（一日）を生き
ていく」〔今まで何とか暮らして来た・自由気ままに暮らす〕

分けて記した辞書の②の記述に「生活する」が用いられているところから、動詞形につ
いても種々の活動という意味での重なりがうかがえる。

4. 分析

上にみた先行研究や辞書の記述から、両語は、経済面を含め、「活動」という意味にお
いて重なりが大きいことがうかがえる。ここでは、この「活動」という意味を中心に、両
語の異同を具体的な表現事例にもとづいて分析したい。

4. 1 活動の個別的な限定の表現

活動を、活動そのものの種類によって直接に限定する表現や、活動と対応して形成され
る社会関係によって限定する表現には、「食生活」「住生活」「精神生活」「対話生活」
「結婚生活」「家庭生活」のように、「生活」がよく使われるようである。社会関係によ
って限定する表現のなかには、「家庭生活」などに対して、その外での活動を大きく「社
会生活」と限定するものもある。これらは、いずれも活動を一つ一つ分析的に捉える意識
による表現といえる。

こうした表現の実例には次のようなものがあるが、いずれも「暮らし」への置き換えは
難しいことが分かる。

(7) 第二次世界戦争後、日本人の住生活は大きく変った。

(『言語生活(357)』 失われゆく<いろいろ端>」22頁)

(8) 兼業化がすすみ農家の家庭生活も都市勤労者とかかわらぬ時間貧乏に追い込まれ
る。(同上23頁)

(9) 対話生活の伝統のない日本人の家庭で、その民主化につづいて茶の間に入って
きたテレビは、その話題を提供して対話を促進するきっかけとなりうるものだっ
た。(同上24頁)

(10) 親を犠牲にしてすべての生活を他にしわよせする。(同上26頁)

(11) 今年の春、結婚して二年が過ぎ、生活にもやっと慣れてきたこともあり、ペラ
ンダに色々な野菜やハーブの種をまいた。(朝日新聞 1994.8.10 読者欄)

また、次の「仕事や生活」という表現のように、「生活」はそれ自体が個別的活動の意
味で別の活動と対立させても用いられる事が注意される。

(12) 庶民は庶民なりに自分の仕事や生活の体験には言葉で表現しえないものを知っ
ている。(同上「言葉・生活・レトリック」19頁)

次の水不足を話題にした実例で、水にかかわるある一つの活動の表現に「生活」が用い
られているのも、このような用法の一つとみることができよう。

(13) 家には井戸も残っているが、食器洗いに使えるくらい。五日からふろに入れず、タライの水にタオルで体をふくだけの生活だ。(朝日新聞 1994.8.8付記事)
これらの場合にも、「暮らし」より「生活」の方が落ち着きがよいことがわかる。

4. 2 場による活動の限定の表現

活動のあり方を、活動と対応する社会関係が総体として存在する場、地域によって限定する場合には、「長屋生活」「長屋暮らし」「都会生活」「都会暮らし」のように両語とも使えるようである。ただし「生活」では、「島暮らし」「浜暮らし」に対する「島の生活」「浜の生活」のように、複合語よりも「の」を介在させる方が自然なものもある。

(14) 六帖、あるいは四帖半、三帖の一室だけといった最低辺層の裏長屋生活者には、荒っぽいにしろかえって活潑な家族内の対話が、そのせまく限られた空間で、あるいはろうじ・井戸端などで長屋一統のコミュニティの対話があったとみるべきであろう。(『言語生活(357)』「失われゆくくろり端」21頁)

さて、地域の中でも活動の中心となる場は住居、すなわち寝起きする場である。自分の所有かどうかという点からすると、この住居には持家と借家があり、さらにその構造から持家には一戸建てとマンション、借家には一戸建て、アパートなどがある。このような分類にもとづいてそのあり方を限定して表現するとどうなるだろうか。まず、持家で一戸建ての場合は、とりたてて「持ち家暮らし(生活)」などとは表現しないであろう。その他の場合は、次のようにともに表現が可能である。

(15) マンション暮らしを続ける。 (16) はじめてのマンション生活。

(17) 都会での借家暮らし。 (18) 見知らぬ土地での借家生活。

(19) アパート暮らしに慣れる。 (20) アパート生活をする。

また、寝起きする場には本格的でない場もあるが、この場合はどうであろうか。その場が、地域社会のなかにある場合と地域社会を離れた場合とをあげてみる。この場合も両語がともに可能であることが分かる。

(21) 旅暮らしの演劇芸人の一座。 (22) 一か月に及ぶ長い避難生活を送る。

(23) 新築までの仮小屋での暮らし。 (24) 新築までの仮小屋での生活。

ところで、地域での活動の中心となる場には、寝起きする場以外に、労働や勉学のために日々繰り返される場として、職場や学校がある。これらの場による限定表現は、次のように、もっぱら「生活」が用いられ、「暮らし」は用いにくい。

(25) 楽しい学校生活を送る。(「楽しい学校暮らしを送る。」は不自然。)

(26) 職場での生活。(「職場での暮らし。」は不自然。)

以上の例をあわせてみると、「暮らし」は、場による限定表現では、もっぱら寝起きする場についての限定表現にあずかるといえる。これは「暮らし」が捉える活動が寝起きする場を中心とするものであることを示すと考えられる。一方、「生活」はいずれの場によ

る限定表現も可能であり、それが捉える活動の場については特別な制約を持たないと考えられる。

また、さらに寝起きする場での活動の表現をみると、その活動の中心となる住居の内、またその中をさらに分けて捉えた表現には「生活」が用いられることが多い。次の実例でも「暮らし」は用いにくいことが分かる。

(27) ながく門の前で立話している人がある。(中略) 互いにはいりだしたらきりが
ない、生活がこわれると知ってはならないのです。

(『言語生活(357)』「座談会 様式の移るなかで」6頁)

(28) いろりは、家の中の生活の中心であった。

(同上「失われゆく<いろり端>」18頁)

(29) 居間で本当に団らん生活が営まれているのだろうか。(同上27頁)

(30) せまい住宅の中で合理的な生活をするため、庶民の住宅にうけつがれてきた「食寝分離」の住み方は、台所への認識のこの変化と結びついて、きりつめた住空間の中で食事室と台所の遊び空間を結合することで節約するダイニング・キッチン(DK)を生み出した。(同上23頁)

上の実例では「暮らし」よりも「生活」の方が落ち着きが良い。ここにも、4.1 でみたように「生活」のほうが分析的であることが関連するのではないかと考えられる。ただし、こうした表現に関し、動詞の「暮らす」の方には次のような、「生活する」と並んで用いられた実例があり、なお検討が必要である。

(31) 土間も大切なところであったと思われまゝのは、今から二百年も前に、奈良地方では、お正月のあいだ土間にむしろをしいて、そこで暮らししたことによっても考えられることなのです。お正月のようにめでたいときこそ、さしきですごすのがほんとうのように思いますが、土間で暮らすというのは、その昔、土間で生活したなごりであると思います。(宮本常一『ふるさとの生活』216頁)

ところで、活動とかかわる場は、客観的な事物のありようとは別に心理的にも構成される。そのような場による活動の限定表現として、実例に次のようなものが得られた。

(32) 茶の間はふだん・ケの生活の重要な空間となった。そこでは、古い農家や町家のような家業や炊事から隔離された、食後の団らんが可能となった。

(『言語生活(357)』「失われゆく<いろり端>」22頁)

(33) これでブク(忌)の生活は終り、普通の生活に帰るわけであるが、この期間はホーリ(神主)も近づかず、人々は忌中見舞の食物を持ってきても黙って置いていくだけである。(蒲生他『伊豆諸島』61頁)

これらは社会的な習俗とかかわった心理的な場による限定の表現である。この二つの実例に関する限りは、どちらかという「生活」の方が用いやすいようであるが、このような心理的な場による限定の表現もなお実例を得てよく検討する必要がある。

4. 3 活動主体による限定表現

実態として、人は大きな社会関係のなかで活動をするにあたって、いろいろな小集団を形成している。その集団のまとまりの単位として、血縁・姻戚関係を有し、住居をともにし、生計をともにする家族集団が大きな位置を占める。その数的なまとまりのありようを、「暮らし」では次のように複合語で表現することができる。

(34) この地区には一人暮らしのお年寄りが多い。

(35) 家族四人暮らし。(36) 三人暮らしの家庭。

一方「生活」は、上の例では、「暮らし」に直接置き換えて表現することはできない。「生活」を用いていえば次のようになる。

(37) 一人で生活しているお年寄り。(38) 家族四人での生活。

ただ、(34)のような一人身の活動については、対象や語感の違ういくつかの複合語があり、「生活」にも「独身生活」、「暮らし」にはさらに「やもめ暮らし」がある。

さて、人の活動は小集団としてのまとまった活動として捉えられる一方、個人としての活動を中心としても捉えられる。この個人を中心とした表現では次のように「生活」の方が用いられやすい。たとえば、もし(41)の「生活が乱れる」に対して、「暮らしが乱れる」という表現を使えば「地域社会の人々の暮らしが乱れる」というニュアンスで用いられることになる。

(39) おたがいは競争相手であり、受験勉強という単調な生活にあけくれている。

(『言語生活(357)』「住宅の現状とコミュニケーション」31頁)

(40) 幼児や小さい子どもは大人とは違った生活のサイクルをもっているが、家が狭ければ親のそれにまきこまれてしまう。(同上31頁)

(41) 最近、生活が乱れて不規則になっている。

なお、以上にあらわれた「生活」と「暮らし」の違いは、既にみた小型辞書の多くが「生活」の意味記述で「生きて生体として活動すること」を「世の中でくらしめてゆくこと」と分けて記述している事や、徳川・宮島(1971)で「暮らし」が世帯を単位にしていることが多いとしている事と呼応していよう。

4. 4 活動を営む主体とその活動との関係意識の表現

さて、活動を営む主体はその内面において自らの活動を対象的に意識し、志向することも多い。このような対象的意識、志向を前提とした表現には、「生活態度」「生活感情」「生活意識」「生活実感」「生活感覚」「生活にあえぐ(追われる、苦しむ)」「生活を楽しむ」のように「生活」がよく使われるようである。これらの場合には「暮らし」は用いにくい。例えば次の事例の場合でも「暮らし」による表現は難しいであろう。

(42) 人々の心や生活態度だけでなく、人間を育ててきた自然をも金儲けの対象に変えてしまった。(『言語生活(357)』「住宅の現状とコミュニケーション」29頁)

次の事例は、主体がみずからの活動のあり方に意識的であり、その意識をもとに、習慣としての活動のあり方へ働きかけを行なっている表現の例であるが、ここにも「生活」の方が使いやすいことが分かる。

- (43) 炊事用具や設備の改善は台所に集中的におこなわれ、台所は住宅の中でもっとも金のかかる設備が集中する所、生活革新の中心核に格上げされ、昔のように客に見せない所からかえって誇示する空間となってきた。

(『言語生活(357)』「失われゆく<いろいろ端>」23頁)

- (44) 家庭生活の民主化を土台にして、食事と食後のほんの僅かの時間であるが家庭内に団らんのある場をつくりだしたDKの普及(同上25頁)

遠藤他編(1993)には、「生活」「暮らし」「世渡り」などの文例対比表があるが、この表で、「自分で生活ができない」は自然であるが、「自分で暮らしができない」は不自然とされているのはこのことと関連していよう。つづまった表現である「生活能力」も、「暮らし」を使って「暮らしの能力」などとするのは不自然なようである。

4. 5 活動の行なわれ方の表現

次に実際の活動の行なわれ方をみてみよう。活動の行なわれ方の表現では、「暮らし」は、「その日暮らし」のように、主体が自ら動き回るといよりも、社会の営みや時の移りゆきに包まれるようにして生きていくという表現で用いられることが多いのに対し、「生活」は、「戦後のタケノコ生活」のように主体が積極的に自ら活動して状況を維持したり、切り拓いたりして、自らの生き方も選択していくというニュアンスで使われることが多い。

動詞の表現には、こうした違いがさらに顕著に表われ、次のような時の推移とともにある活動の表現には「生活する」は使いづらいようである。

- (45) 病院では何もすることがないので、毎日静かに寝て暮らしていました。

(『外国人のための基本語用例辞典』)

- (46) 毎日、のんびりと遊んで暮らしている。

- (47) 夏休みには、別荘で暮らした。

一方、次のように、同じ時の推移の中にあっても、主体が自ら懸命に活動を維持・継続していく状況には「生活(を)する」や「生活を送る(続ける)」などが使われやすい。

- (48) 子供までが懸命に働いて、なんとか一家が生活を続けている。

- (49) (大きな会社の役員も、役員室の中へ入ると、結構、ゴルフのバットの練習なんかして(笑)寂しそうに孤独な生活を送ってる。

(『言語生活(357)』「座談会 様式の移るなかで」8頁)

なお、このような違いは、自らの活動に対する意識を前提とする表現や、主体の能力を問題とする可能表現で、「生活」のほうが用いられやすい事とも関係していよう。

4. 6 文体的傾向と複合語

実例を文体の面に注意してみると、どちらかといえば、「暮らし」は和語の多い「世の中の暮らしの移りゆき」のようなやわらかい表現に用いられることが多く、漢語の多い硬い表現には用いられることが少ないようである。一方、「生活」は和語の多い表現とともに、漢語の多い「社会生活の変化」のような表現にも多く用いられるのが注意される。次の同一資料の実例にもこのような傾向がうかがえる。

(50) 支配層の生活のしかたは被支配層の町人や農民の上層部によって真似られ、次第に普及・浸透して(『言語生活(357)』「失われゆくくろり端」20頁)

(51) 古い大世帯の町家では、つつましい暮らしで(同上21頁)

これには、和語、字音語としての二語の成り立ちの違いがかかわると考えられる。

なお、このように漢語になじむ「生活」は、複合語においても、「暮らし」に比べて分析的な表現を構成することが多く、次のようにやや複雑な構成のものも認められる。

(52) 急速にかわる家庭教育・家庭生活の必要に、民主的家庭生活の経験をもたない親たちはついてゆけない。

(『言語生活(357)』「失われゆくくろり端」26頁)

5. 終りに

本稿では、先行研究や辞書の記述から重なり大きい部分であるとみられる「活動」の意味を中心に、「生活(生活する)」「暮らし(暮らす)」の異同を分析した。観点としていくつかに分けて記したが、各々に認められた特徴は相互に関係しあうところが多いと考えられる。また、本稿では扱えなかったが、両者は文型についても異なる面がうかがえる。これらの点については今後の課題としたい。

(注)『例解』は、さらに③として、「毎日の暮らしが続いていく人生」を分けて記述している。

〔記述資料〕 『言語生活(357)』1981年9月号(筑摩書房)

宮本常一『ふるさとの生活』(講談社学術文庫版、1986年発行)

蒲生正男他『伊豆諸島』(未来社、1975年発行)

—参考文献—

徳川宗賢・宮島達夫1971 『類義語辞典』(東京堂)

森田良行1984 『基礎日本語3』(角川書店)

遠藤織枝他編1993 『類語例解辞典』(小学館)

(ふじた かつよし・佐賀大学助教授)